

の確立に大きな足跡を残した。ヨーロッパ各地の文化人と交流し、その思想を開花させたエラスムスの名にちなんで命名された「エラスムス」計画は、彼の偉業にならって、ヨーロッパ各地の大学など高等教育研究機関が自由に交流する「ヨーロッパ学生交流計画」が、その中心的活動である。したがって、「エラスムス」の正式名は The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students である。

2001年3月、オランダ・アムステルダムの小・中・高・大学、計8校を訪れた。最初の訪問は、Nicolas 小学校の5年生のクラス。All in English の授業であった。子どもたちは、洋の東西を問わず、かわいい。23名全員が、明るく活発に、英語コミュニケーション活動を展開していた。オランダの公用語は、オランダ語(90%)フリーズランド語(10%)で、学校教育の使用言語は、オランダ語である。英語は、公用語ではない。しかし、オランダの生徒・学生は、学校生活で英語を話し、能力も高い。言語政策として、英語の開始年齢は、小学校の最終2学年、すなわち、10歳から外国語としての英語が必修科目となっている。

Berlagelyceum 中学校1年生のクラスでは、英語でプレゼンテーションをしていた。積極的に、クラスの前へ出て、一人、または、ペア・ワークで声高らかに、発表する姿が微笑ましく感動的であった。中学校では、英語ともう1か国語が、必修科目。1年間の学習時間は、オランダ語160時間、英語133時間、フランス語またはドイツ語53時間。授業と宿題で1年間に、1,600時間。宿題が、各地域により義務付けられている。外国語教育の教育目標として、学習スキルの指導、実践的なコミュニケーションの指導に重点がおかれている。

外国語教育の成果は、小・中・高・大学において、各々到達目標の設定がなされ、卒業年度における到達度テストによって、その成果が示される。また、IEA(国際教育到達度評価学会)による国際比較の評価調査・報告が行われている。

アムステルダム大学では、学生たちは、各自のホームページを作成しており、その Website に

European Language Portfolio (ELP) が導入されている。このポートフォリオは、「ヨーロッパ言語年 2001」に示されている語学学習の水準に向けての自己評価記録である。Language Passport(学生の語学パスポート)、List of Examinations(語学学習の到達度テストなど)、Language Biography(言語学習歴)の3部からなっている。TOEFL などの外国語検定資格や、交換留学プログラムへの参加、文通経験、外国語話者の訪問受け入れ体験、異文化交流体験などが記載されている。例えば、“My Language Skills”, “What I can do”, “I can read a menu.” など、具体的である。学生個人情報をどこまで公開できるのか、質問したところ、「外部に向けて発信できることが自分を見直すきっかけになる」、「インターネット上のホームページでオープンにすることで、地域社会の人々とも相互意見交換ができるのが役立つ」と語っていた。情報化時代の開かれた自己評価、自己PRの実態に接し、感動を禁じえなかった。

最後に、「ヨーロッパ言語年2001」の合言葉を紹介しよう。

“Learning languages opens doors, and everybody can do it!”

倫敦地下鉄広告

経営学部
安藤 聡

ロンドンの地下鉄は楽しい。などと言うと、車内は狭く汚いし冷房もないし運賃は高いし電車は時間通りに来ないし突然何の前触れもなく駅が閉鎖されるし長いエスカレーターはよく止まるので歩いて上り下りすることを余儀なくされるし縦んば動いていたとしてもエスカレーターのステップ

とベルトの動きが合っていないから右手だけ前に行ってしまったり後ろに行ってしまったりするしあんなふざけた地下鉄のどこが楽しいのか、という意見もあるだろうが、広告が楽しいのである。駅の壁や車内を彩る広告を読んでいるとく何しろ来るはずの電車はなかなか来ないし、来たと思っ
て乗り込むと途中で訳もなく止まってしまうので、有り難いことに広告を読む時間は十分にある。英語の勉強になるばかりでなく英国文化の意外な一面が見えて来たりするのだ。例えば8月頃にはやたら花粉症の薬の広告がふえるが、このことは日本では春先が花粉症の季節であるのに対して彼の地では夏の終わりがその時期であることを物語っている。「花粉症」は英語で 'hay fever' というくらいだから干し草がその主な原因の一つなのである。

ここ数年で最高傑作だった広告はヴァージン・アトランティック航空のものである。この航空会社（最近では鉄道会社から生命保険、宝くじの販売までやっている。そう言えばヴァージンコーラというのもあった）は元々レコード会社が母体になっているため、機内のエンターテインメントが充実していることが売り物なのだ。エコノミークラスの全席にTVモニターをつけてニュース、映画からゲームまで楽しめるようにしたのもこのエアラインが最初であった。私も英国に行くときにはよく利用する。さてそのようなヴァージン・アトランティック航空であるが、その広告はエコノミークラスの座席に座った坊主頭の男の後頭部を大写しにして、広告文は 'Other airlines' in-flight entertainment 'とその後頭部に白抜きで書かれている。そして下の方に控えめに、' Fly Virgin. And get a seat back TV in Economy. 'と添えてある。確かにエコノミー席にテレビのない某N航空やZ空、或いはヴァージンの宿敵Bエアウェイズで日本から英国に行く場合、およそ12時間の飛行時間をずっと他人の後頭部を眺めて過ごすことになるのだ。なお、Bエアウェイズでも最近ではテレビモニターをつけた飛行機が増えているが、ヴァージンの真似をしたのかそれとも最近の国際線用旅客機

には標準装備でついているのかは定かではない。ヴァージンの広告は絵柄を坊主頭の男にしたことによって強烈なインパクトを与えることに成功していると言えよう。因みに ' Fly Virgin. ' は命令文で、' Virgin ' の部分は副詞だと思えばよい。つまり「ヴァージンで飛べ」という意味である。

最近のもう一つの名作はヘアカラーの広告であった。左半分に海を背景にヴィキニ水着の美女がブロンズの髪を海風に靡かせて俯き加減に微笑んでいる。よく見ると彼女は自分の水着のパンツの中を覗き込んでいる。そして左半分に広告文。' KEEPS HAIR COLOUR SO LONG YOU'LL FORGET YOUR NATURAL ONE. ' 判りますか？ 判らない人のために文法的に説明しておきましょう。この文はいきなり動詞で始まっているけれど、「三人称単数現在のs」があるから命令文ではないことが判ります。前に主語 ' IT ' が略されているのです。IT が指すのは勿論この毛染めです。そしてこれはいわゆる「so-that 構文」です。但し ' THAT ' は略されていますが本当は ' YOU'LL ' の前にあります。これで判りましたね？ 正解は「(この毛染めは)色がとても長持ちするので、生まれつきの髪の色を忘れてしまうでしょう」ということです。彼女が自分の下腹部を見て「生まれつきの色」を確認していることは言うまでもありません。

日本でもJR各社の広告には優れたものが多いが(何しろ山下達郎の歌を使って名古屋駅のコンコースをあれだけロマンティックな風景に描いてしまったJR東海のクリスマスシーズンのCMがその典型である)英国のBRも負けていない。JRが映像、雰囲気売り物にしているとすればBRは言語、ユーモアで勝負していると言えよう。民営化以前の頃の話になるが、ロンドン-ブリストル間の所要時間が大幅に短縮されたとき地下鉄に出た広告は、' We've made The Times's crossword more difficult. ' 『ザ・タイムズ』』といえれば保守派インテリ向け新聞の最右翼である。この紙面に毎日掲載されるクロスワードは大変難しい。しかも日本の新聞雑誌に時折あるクロスワードと違って

すべてのマスをただ埋めるだけで、そこにある単語が隠されているわけでも全部埋めると賞品がもらえるわけでもない。ただひたすら言葉を探して行くだけの知的ゲームである。長距離列車の車内では見るからに専門職という風情の「英国的」紳士が真剣な顔をしてタイムズのクロスワードを解いている光景をよく見かける。乗車時間が短くなれば当然解答のための制限時間も短くなるというわけである。同じ時期にロンドン - リヴァプール間にも高速の特急列車が走るようになって、その広告は 'Take twenty winks in our train.' であった。いくら何でも20回ウィンクする間にロンドンからかの港町まで行かれるわけではないのだが、これは英語によくある誇張によるユーモアである。またここでは 'forty winks' という「食後のまどろみ」を意味するイディオムとの関連を見落としてはならない。食後のまどろみの半分の時間でリヴァプールに到着してしまうということなのである。ピートルズならこれを「黄金のまどろみ」'Golden Slumbers' と歌うところであろう。それにしても知的なクロスワードと怠惰な午睡のコントラストはブリストル行きの特急とリヴァプール行きのそれとの客層の違いを反映していると考えるのは深読みし過ぎだろうか。ついでながら今ヴァージングループはとても速い高速列車の導入を予定しているらしい。これが営業運転を開始した暁にはまた広告コピーが楽しみである。

ロンドンの南西のケント州は「ガーデン・オブ・イングランド」と通称される美しい田園地帯であるが、ここに「イングランドで最も美しい城」と言われるリーズ城がある。この城はおよそ900年前ヘンリー1世の時代に建てられ、のちにヘンリー8世が作らせた豪華な大広間が有名である。ご存知の通りこのヘンリー8世はとんでもない奴で、宗教改革を行なってイングランド国教会を創設したことで知られるが、その理由が妻と離婚して愛人と結婚したくなったのにローマ法王がそれを許可しなかったからローマン・カソリックを脱会して自分で勝手に教会を作ってしまったということだから笑うしかない。結局妻を処刑して愛人アン・

ブーリンと再婚するがこの新しい妻にもすぐに飽きてしまい、次々と離婚再婚を繰り返しては前妻を処刑していった。このヘンリー8世の城でもあったリーズ城の広告は次のようなものであった。'Now Henry has gone, it's perfectly safe for wives.' 文頭の 'Now' は後ろに 'that' が略されていて、接続詞である。「.....した今となっては」くらいの意味だ。危険人物ヘンリー8世は1547年に死んでしまったので、今となっては奥さんたちがリーズ城に行っても全く安全なのであった。

最後に、これは広告ではないが、地下鉄の扉に必ず貼られている注意書き 'OBSTRUCTING THE DOORS CAUSES DELAY AND CAN BE DANGEROUS' (閉まる扉の前に立つと電車の遅延を引き起こし、また危険でもある) に対する定番の落書きがある。それは 'OBSTRUCTING' の 'ING' と 'CAUSES' の三単現の S, それに 'CAN' の3カ所を塗りつぶしてしまうだけの簡単なものだ。これによって注意書きは 'OBSTRUCT THE DOORS CAUSE DELAY AND BE DANGEROUS' になる。そうなる意味は「閉まる扉の前に立ち、電車を遅らせ、危ない目に遭いなさい」という命令文になってしまう。落書きの犯人が几帳面な奴の場合、'DOORS' の後にちゃんとコンマが打ってあったりする。

中国と日本企業

現代中国学部
服部 健治

三資企業の「駆け込み寺」

厳しい寒さがようやく終わり、長安街に立ち並ぶ街路樹の木々に青葉が芽を吹き出そうとしてい